

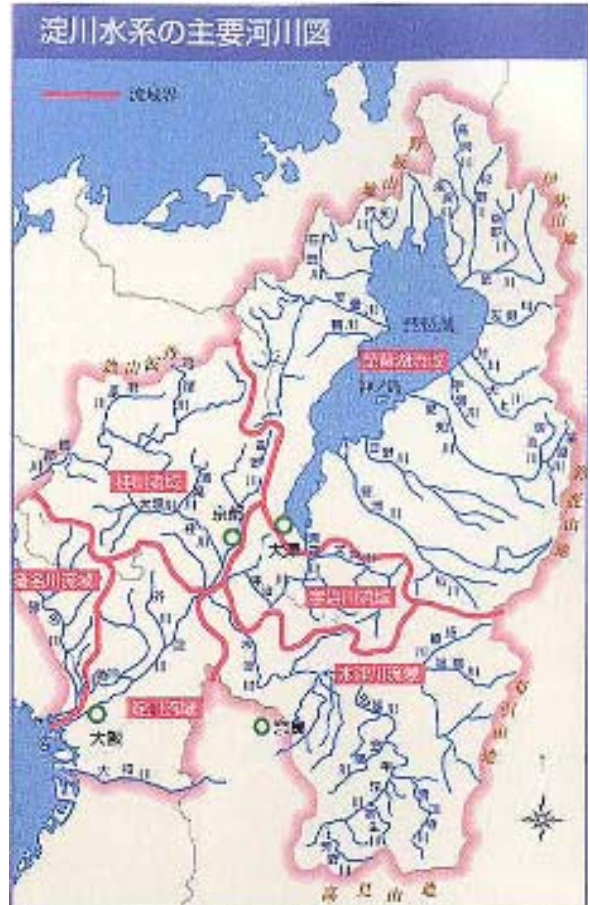
# 淀川水系史

## 1. 淀川流域の課題

近畿、昔の呼び名では『畿内』。この『畿』とは“都からわずかしか離れていない領地”を意味し、田と幾（ちかい）という字で構成されていることから、都の食糧を賄うための田畑が広がっていた土地とも解されています。畿内には緩勾配の河川が多数存在し、容易に田畑を潤すことができました。また、天然の水瓶として琵琶湖があり、豊潤な平野が広く分布していました。このような条件に恵まれた地勢によって淀川流域では稲作が定着していき、飛鳥京・難波京・近江京・平城京・長岡京・平安京など幾つもの王朝が栄えることができたと言えます。

しかしながら、課題がなかった訳ではありません。1つは、琵琶湖東部に広がる未利用の平野です。湖東に存在する野洲川・日野川・愛知川等は、急峻で山々からの土砂流出が激しく、結果として天井川を形成したため、農業用水としての活用が困難でした。また、琵琶湖には大小120もの河川が流れ込むにも関わらず出口は瀬田川1つしかなく、梅雨時になると琵琶湖に一気に水が流れ込み水位が上昇し、周辺の平野は水没していました。そのため、湖東地域では農作物を安定して生産することが困難でした。

もう1つは、淀川下流域の洪水被害です。淀川には琵琶湖からの流出に加えて桂川・木津川・大和川が合流していましたが、河川勾配がかなり緩いため排水するまでに時間がかかり、淀川下流域の平野では洪水が頻発していました。推古帝から江戸時代に至るまで記録に残る淀川の洪水は239回、実に5年に一度の頻度で洪水が起こっていました。そのため、淀川下流域の広大な平野でも十分に農産物を生産することはできませんでした。

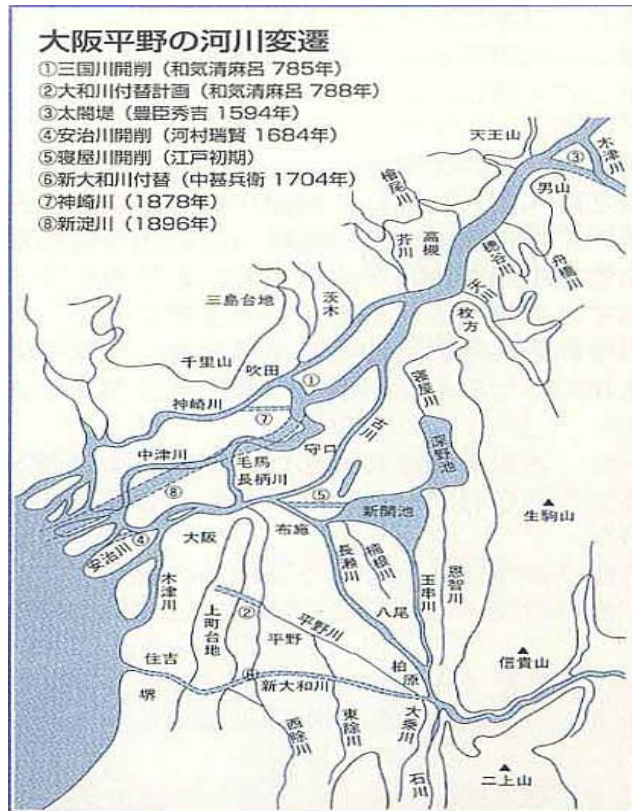


## 2. 治水対策の変遷

それでは、これらの地域では度重なる洪水に対してどのような対策が採られてきたのでしょうか、近代に続く淀川流域の治水の変遷について主な土木事業を紹介します。

### 【大和川の付け替え】


淀川下流域に生活する人々は、頻繁に起こる洪水対策として、湾曲して淀川に流入する大和川を直接大阪湾に導くことによって淀川の水位を下げることを考えました。この方法は、古くは奈良時代から試みられ、江戸時代に入ると庄屋や地主などが私財を投じて挑戦してきました。大和川本流の付け替えは、地元から幕府に度々嘆願されたが、当時淀川の水運を重視する幕府や付け替え予定地の住民らの反対運動により中々認められることがありませんでした。しかし、度重なる洪水被害や大和川付け替えによってもたらされる恩恵を考慮した結果、1704年に大和川の付け替え工事が実現しました。この付け替え工事によって、旧大和川筋の新田開発が進み、1,000haを超える水田が創出されました。



『大地への刻印』(公共事業通信社より転載)

### 【伏見の築堤】

淀川上流部の伏見において、戦国時代末期に豊臣秀吉により宇治川・木津川・桂川が合流する3河川の築堤工事が行われました。伏見は、大阪・京都・奈良を結ぶ要衝であり、この地を重視した秀吉が晩年を過ごした場所でもあります。秀吉は、それまで遊水地(巨椋池)に流入していた宇治川を分離して伏見の町へと導き河港として整備を進めるとともに、桂川に堤防を築くことで流路を安定することに成功しました。これにより、淀川下流域の洪水の被害は軽減され、土砂が遊水池に溜まることなく下流に流出するようになり、淀川河口のデルタ地帯にて土砂が堆積し、江戸時代に都市を形成することにつながりました。また、伏見の築港は江戸初期の角倉了以による高瀬川開削へと受け継がれ、これにより京都と大阪を結ぶ船運の大動脈が完成し、「上方」と呼ばれる一大経済圏が確立しました。



**すみのくら りょうい**  
**コラム① 【 角倉了以 】**

角倉了以は、1554年京都において「土倉」を経営する資産家のもとに生まれ、若い頃から商業や先端技術を学び育った。家督を継いでから潤沢な資産を活用するために選択したのが、河川開発に関する土木事業であった。了以が手懸けた特に有名な事業が1614年に完成した高瀬川開削であり、鴨川と平行する人工水路を掘り京都と伏見を水運で結び、高瀬舟を運営することで京都・大阪間の物資流通の大動脈を創ったのである。高瀬川開削は、民間による社会資本整備の先駆けとも言われている。

『国づくりの風景』(建設業しんこう)より転載

### 3. 近代の河川開発

なんごうあらいぜき

#### 【 南郷洗堰 】

明治の文明開化までに一定規模の河川整備は進みましたが、それでも洪水被害を防ぐことはできず、明治18年(1885年)の淀川大洪水では26万人が被災したと言われています。淀川流域で頻発する洪水を防ぐためには、流域全域を視野に入れた抜本的な河川改修が必要でした。この千年以上続いた難問題を、見事に解決したのが「南郷洗堰」を始めとする淀川河川改修です。南郷洗堰は、琵琶湖の唯一の流出口である瀬田川をゲートによって流量を調整できるようにするという構想で、琵琶湖からの流出量を調整することに初めて成功しました。一連の河川改修工事は、西洋で土木技術を学んだ日本人技師らによって発案され、内務省技師の沖野忠雄が中心となって明治38年(1905年)に「南郷洗堰」が完成しました。この南郷洗堰によって淀川下流域の洪水被害は激減し、農作物の安定生産に大きく寄与しました。



#### コラム② 【 おきの ただお 沖野 忠雄 】

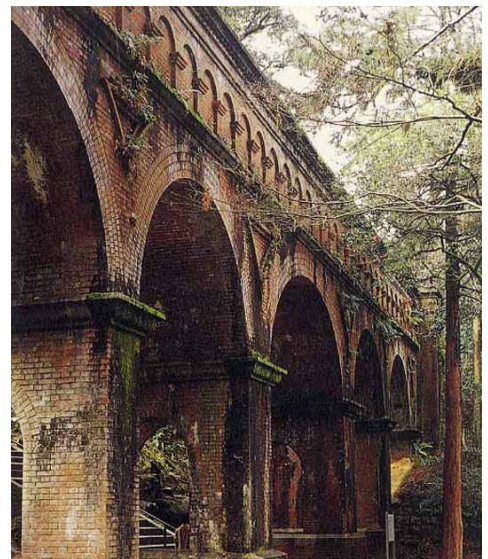
沖野忠雄は、江戸時代末期の1854年に豊岡藩に生まれ、維新後明治政府に登用され、明治8年(1875年)に西洋の土木技術を学ぶためパリに留学、同14年に土木建築技師の資格を取得し帰国。その後、内務省技師として全国各地の河川工事監督官を歴任。同29年から淀川改修工事と大阪築港工事の二大事業の工事責任者として陣頭指揮をとり、その一環で同38年に南郷洗堰を完成させた。同氏は、西洋の河川土木技術を日本の急峻な河川に応用し、日本の河川土木の基礎を築いた功績で名高い人物。

『淀川百年史』(近畿地方建設局より転載)

びわこそすい

#### 【 琵琶湖疏水 】

これまでの大規模な河川改修では主に治水対策を行ってきましたが、産業革命以降、都市域における工業用水の需要が飛躍的に拡大したため利水対策についても求められるようになりました。こうして日本3大疏水の1つである「琵琶湖疏水」が計画されました。この計画では、琵琶湖と京都の間にある比叡山の山腹にトンネルを掘り、琵琶湖の水を京都まで導水するという構想でした。この疏水により京都市内へ供給された水は、かんがい用水、織物などの工業用水、飲料用水として利用されただけでなく、高低差を利用した水力発電にも活用されました。そして、京都の水と電力の需要を満たしたことにより、東京遷都の影響で経済が縮小傾向にあった町に再び活気を呼び戻しました。



南禅寺水路閣  
(琵琶湖疏水の水道橋)

## 4. 戦後の農地開発

淀川流域の河川開発が進む中、この地域の農業はどのように展開していたのでしょうか。治水対策により洪水や浸水害は激減し、淀川下流域に広がる農地では安定して生産できるようになりました。また、工業化の進展により、比較的安価に揚水機や化学肥料などを国産で生産できるようになり、これら新技術によって農作業の効率は飛躍的に向上していきました。

おぐらいけかんとく

### 【 巨椋池干拓 】

河川改修は淀川流域の治水・利水に大いに貢献した一方で、自然環境に負の影響も与えました。その顕著な例が、元々遊水地であった「巨椋池」です。明治39年に実施された宇治川の河道付け替えにより巨椋池は完全に河川と分離され、その結果徐々に干上がり、水質の悪化によってマラリアの発生まで引き起こされました。こうした状況の中、周辺住民は未利用の湿地帯を有効活用するために、巨椋池を完全に干拓し水田として再生することを切望するようになりました。



巨椋池の干拓地（巨椋池事業誌より転載）

周辺住民の願いが叶い、巨椋池地区は昭和8年に戦後初の国営干拓事業として着工され、新たに634haの農地が造成されるとともに、1,260haの周辺農地の排水改良も行われ、昭和16年に事業が完了しました。この結果、巨椋池は近畿圏の一大食糧生産基地として生まれ変わり、戦中・戦後の食糧難を支えました。なお、都市化が進んだ現在においても、米以外に聖護院大根など京野菜の重要な生産地に位置づけられており、京都市内に新鮮な野菜を供給するなどその役割は益々高まっています。

### 【 湖東の農業水利事業 】

干拓は琵琶湖東部の内湖においても実施されました。内湖は元々水深が浅く、淀川改修工事に伴い琵琶湖の水位が低下してきたことから、戦後の食糧増産政策も相まってこの地域でも干拓が行われるようになっていきました。代表的な琵琶湖干拓として、大中の湖干拓が昭和21年に始まり、新たに1,145haの農地が創出されました。

また、琵琶湖東部は雨が少なく河川は急峻で利用できず慢性的に水不足に苦しみ、度々水争いが起こる地域でもありました。しかも琵琶湖の水位が低下したことで、湖からの揚水かんがいに頼っていた沿岸農地では水不足がより深刻化しました。これらの課題を解決するため、安定した水供給を可能にする大規模な農業水利事業が実施され、河川上流にダムが建設されていきました。そして、湖東に存在する主な河川には国営及び県営事業により、芹川の芹川ダム、犬上川の犬山ダム、宇曾川の宇曾川ダム、愛知川の永源寺ダム、日野川の蔵王ダム・日野川ダム、野洲川の野洲川ダム・大原ダム・青土ダム等々、数多くのダムが築かれ、湖東平野の農地の水不足問題を一気に解消することとなりました。その結果、この地域は米の一大産地へと生まれ変わり、滋賀県のみならず近畿各地の米の消費を支えています。

## 5. 健全な水循環の構築

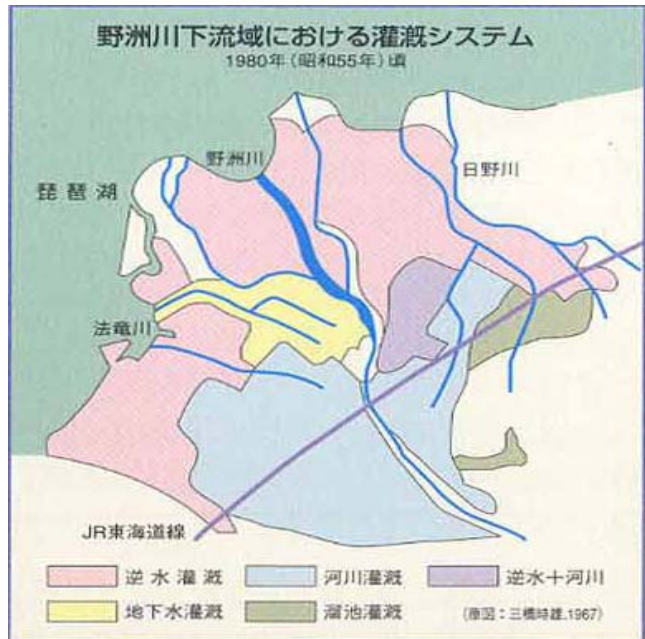
琵琶湖沿岸地域では、ポンプが登場し始めた昭和初期から、湖水を汲み上げて上流の水田を潤す逆水かんがいが行われていました。そして現在、この地域循環型の水利用に環境面での配慮が加わり、上流の水田で利用された農業排水が琵琶湖に流入する前に貯留し、水処理した上で再び上流の水田に戻すという水のサイクルが完成しています。

滋賀県では平成8年度から、生産性を維持しながら環境と調和した農業を推進し、地域住民と一体となって琵琶湖の環境保全を図ることを目的とした「みずすまし構想」に取り組んでいます。これに関連して、平成13年度からは水田生態系に配慮した「魚のゆりかご水田プロジェクト」を開始し、魚が産卵・生育できる水田環境を取り戻すことに成功しました。

これら農村地域の環境保全や持続可能な農業を確立するためには、地域内での水循環を構築することが大前提であり、この水循環を支える農業水利施設を未来に継承することが益々重要となっています。

### 【 湖北の地域用水機能増進事業 】

国における新たな取組として、健全な水循環の構築を図るため実施された地域用水機能増進事業があります。この事業では、集落内の水路を流れる水を農業用水だけでなく防火用水や消雪用水などへ利活用することを目的として、計画段階から地域住民と共に話し合い、地域が理想とする整備の方向を決め、水路の改修を行っています。これにより地域住民が施設に愛着を持ち、将来にわたって維持管理にも携わることを期待しています。今後、限られた農地や水など地域資源を未来の子どもたちに継承していくためには、農家だけではなく地域住民をはじめ都市住民も維持管理活動に参画することが必要となっています。



宗宮功編著『琵琶湖』(技報堂出版)より転載



地域用水機能の事例

<引用> 「王朝の湖水」パンフレット (制作：淀川水系土地改良調査管理事務所)